

横山晋一郎著「島根大学教育学部の教員養成」

IDE 現代の高等教育「学習させる大学」2009年11月号を読む

島根大学教育学部の教員養成

1. 島根大教育学部は、04年、文科省の教員養成大学・学部の再編・統合政策の下、鳥取大の教員養成課程を引き受けて、山陰唯一の教員養成特化型学部として再出発した。これを機に、大胆な改革が始まった。
2. 我々は教育職員免許法が定める必要科目をただ並べるだけで、どんな教員をどう育てたいのか、真剣に教育内容を考えて来なかったのではないか。3年間ほど大学を離れ小さな町の教育長を務めた経験がある高岡信也学部長は、教育学部の現状に強い危機感を抱いていた。「現場が求める人材を育てていない」「大学で学んだことが役立たない」。学校現場、卒業生の双方から厳しい声も届く。「社会が求める教員を育成しない教育学部は生き残れない」
3. 改革の目玉が、教育実習や野外活動支援など大学内外の体験学修を4年間に1000時間以上経験しないと卒業させない制度だ。教育実習は1年生から始め、4年生まで続く。学内外の体験学修には地域の協力を求め、放課後活動や学習支援活動、野外活動などを数百件用意した。体験学修の重要性は誰もが認めるが、1000時間というのは前代未聞だ。「授業が疎かになるのでは」「本当に実現できるのか」。学内の訝る声に、高岡学部長は「教員になるには、子供に触れ学校を知り多様な体験を積むことが絶対に必要なのに、教育学部にはそれが足りなかった」と説得した。
4. 教育課程も改めた。まず、島根大学が育てたい教員像を「教師力の10の軸」として具体的に示し、1人1人の学生がそれをどれだけ身に付けたか、ポートフォリオを作って、学習を支援する体制を作った。シラバスには、教員は、その授業で「教師力の10の軸」のうち、どの力を身につけさせたいのかも示した。外部の人を招いて面接道場を開き、大学教員と異なる視点で学生を鍛える仕組みも作った。

[コメント]

真剣にやれば、横山先生の御指摘のように島根大学のようにならざるをえない。やるか、やらないかで教師教育の質が決まる。島根大学をベンチマークの対象の一つにさせて頂き、全国の教師教育担当者は島根大学から大いに学ぶべきと考える。

- 2009年11月16日林明夫記 -